

# 1Tp-13(P) 高齢者の動脈硬化と仕事

○山本学 井上久美子

(東京都立短期大学)

目的 ライフスタイルの違いが動脈硬化の進展に及ぼす影響をみるため、今回は常勤の仕事と動脈硬化の頻度との関係について検討した。

方法 対象はある健康保険組合で平成2年度に成人病検診を受診した60歳以上の732名で、その内訳は常勤の男性551名、常勤の女性90名および家族検診を受診した女性91名である。動脈硬化の判定には大動脈については胸部XP所見、小動脈についてはEKG所見を用いた。

結果 まず高齢者予備軍とみられる60-64歳でみると、大動脈硬化の出現率は常勤の男性31.1%、女性26.9%、家族の女性3.7%で、家族の女性での出現率は他の2群と比較して明らかに低かった( $P < 0.01$ )。またEKG異常の頻度でも常勤の男性32.2%、女性25.0%にたいし家族の女性の頻度は11.1%で常勤の男性の頻度より有意に低かった( $P < 0.01$ )。つぎに65-69歳でみると、大動脈硬化の頻度は常勤の男性43.2%、女性37.0%、家族の女性27.8%で、EKG異常の頻度は常勤の男性31.7%、女性29.6%、家族の女性21.1%であった。また70歳以上の高齢者の大動脈硬化の頻度は常勤の男性53.9%、女性36.4%、家族の女性27.8%で、EKG異常の頻度は常勤の男性54.5%、女性36.4%、家族の女性27.7%であった。以上から、常勤の職を持つ女性の動脈硬化の出現率は動脈の大小に関わらず常勤の男性と家族の女性との中間の数値であることが示された。

考察 女性は動脈硬化の進展が遅いといわれるが、これは男女の日常生活の違いによる部分も大きく、女性でも常勤の仕事があると動脈硬化になりやすくなると見られた。このことは高齢者の生活での健康とProductivityに新しい問題を提起するものと考えられる。